

1 背景とねらい

ピーマンの生産を飛躍的に拡大するためには、苗生産の外部委託化を前提とした、各種作型を組み合わせた新たな栽培技術体系を構築する必要がある。

苗生産の外部委託化を定着させるためには、苗の小型化等による育苗の効率化を図るとともに、栽培面では若苗定植技術等、省力・低コストの苗利用技術の開発が必須条件となる。また作型では、一部県南地帯で田植え作業終了後に定植する遅まき作型が導入されているなどの動きがある。

今回は総合的な技術体系を確立する一つの方策として、遅まき作型における播種限界と同作型における小型苗利用技術について検討したので、その結果を参考に供する。

2 技術の内容

1) 遅まき作型の生育・収量特性と播種限界

播種期の晩限は、10a当たり収量で6~7トン確保できる3月下旬とする。同作型における生育・収量特性は以下のとおりである。

作 型	定植期	収穫期間	期待収量	商品果率	草丈比
慣 行 (2月上旬まき)	4/下旬	5/下旬~10/下旬	8~10ト/10a	並	100
遅まき (3月下旬まき)	5/下旬	6/下旬~ "	6~7	やや高い	70~80

2) 小型苗利用技術

3月下旬の遅まき作型では、セル成型苗を直接定植苗として利用できる。セルの大きさは50セル(容量60ml)程度を用い、育苗期間55~60日、草丈10cm程度の若苗を定植する。

3) 適応地域 県下全域(ハウス栽培)

3 指導上の留意事項

- 1) 気温が高くなってからの定植となるので、草勢が軟弱徒長に傾きやすいうえ、アブラムシ、ヨトウガ等害虫の発生が盛んになるので、発生初期の防除に留意する。特に育苗時の防除は徹底する。
- 2) セル苗直接定植では、特に定植直後から第一花開花頃までの、定植初期のかん水や温度管理に十分留意する。
- 3) セル苗を直接定植した場合、慣行苗と比べ初期収量はやや劣るが、後期収量が増加し総収量はほぼ同等となる。
- 4) 基本枝の誘引は慣行に準じて行うが、作期が短いため、側枝は放任に近いかたちでよい。
- 5) セル苗直接定植技術の各種作型への適用及び苗質と生育の関連等については、今後引き続き検討する予定である。

4 試験成績概要

表1 播種期ごとの収量

播種日 (定植日)	良果収量		商品果収量 ^a	
	kg/a	同左比 %	kg/a	同左比 %
2/ 5 (4/22)	781	(100)	1,050	(100)
3/20 (5/31)	607	78	743	71
4/10 (6/17)	433	55	584	56
4/30 (6/24)	388	50	512	49
5/20 (7/ 9)	311	40	409	39
6/10 (7/25)	263	34	307	29
7/ 1 (8/ 8)	142	18	172	16

a) 良果 + 乱形果

表2 育苗容器の大きさごとの収量

容器の種類 (定植日)	良果収量		商品果収量	
	kg/a	同左比 %	kg/a	同左比 %
4号ポット苗 (5/31)	607	(100)	743	(100)
3.5号 " (5/31)	528	87	700	94
3号 " (5/31)	564	93	710	96
2.5号 " (5/28)	465	77	605	81
50穴セル苗 (5/23)	544	90	737	99

表3 時期別商品果収量(kg/a)

播種日	5月			6月			7月			8月			9月			10月		
	中	下		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
2/ 5	1	5		37	43	59	88	50	139	84	87	88	60	111	53	50	57	38
3/20	-	-		-	-	1	17	47	97	66	92	104	51	75	68	39	42	44
3/20セル	-	-		-	-	-	2	12	32	60	71	151	71	108	103	55	34	39
4/10	-	-		-	-	-	-	9	38	41	63	98	55	66	69	62	40	44
4/30	-	-		-	-	-	-	-	8	22	59	93	47	71	74	49	37	52